

紫式部 越前への旅

——紫式部集をめぐって——

一

紫式部の父である藤原為時が、直物によって越前守となったのは『日本紀略』長徳二年正月二十八日の記事であきらかなところである。また、彼女がこの父につき従って越前へ下向したことは『紫式部集』によって窺い知れる。しかし、その旅程についてはこの「家集」の他にほとんど資料もなく、彼女の集をたよりとするほかない。

ここでは、この『紫式部集』を中心に据えて、歴史地理学、また各町史、郡史などを周辺資料として、彼女にとつて物思ふ旅、多分生涯においてこの一度しかなかつたであろう大きな旅を通して彼女の様子を追いかけてみたい。まずはそのはじめとして、現在歌の配列等の問題を含めて諸説に分かれている旅の行程を明らかにする論として、以下に述べていくこととしたい。

二

久保田 孝 夫

国守の京都出発については『朝野群載』^①の次の記事が参考になる。

一、赴_レ任国_ニ吉日時事

新任之更赴_レ任国_ニ之時。必扱_レ吉日時_ニ可_レ下向_一。世俗之説。降雨之日尤忌_レ之。出行亦改_レ吉日_一。更出行耳。是任_レ人情_ニ非_レ有_レ必定_一。

一、出行初日。不_レ可_レ宿_レ寺社_ニ事

世俗説云。不_レ食_レ索餅。不_レ聽_レ凶事。不_レ宿_レ寺中。不_レ寄_レ社頭_一云々。但今世之人。亦随_レ気色_ニ耳。

一、出京関間。奉_レ幣道祖神_ニ事

出京之後。所_レ宿之処。密々奉_レ幣道祖神_一。即令_レ祈_レ願途中平安之由_一。

まず受領として任国に出発するに際しては、吉日時を選んで出発したこと、これは当時の陰陽道のあり方からみても当然といえる。

また、出発初日は寺社への宿泊は慎んだようである。ただしこれについては次第に守られなくなってきたようで、宿泊する場合もできたのである。これは当時の宿泊施設にかかわるところである。初日の宿泊は寺社を慎めということは逆みると、初日以降大勢の随人を伴う旅の場合、自ずから宿舎として寺社に頼らねばならなかったのだといえる。紫式部下向の当時においては、かなり荒廃していたと思われるが、駅舎への宿泊も考えられる。時代は少しさかのぼるが、菅原道真左遷の折の明石の駅での詩にその例をみる。

又、はりまのくに_一におはしましつきて、あかしのむまやといふところに御やどりせしめ給て、むまやのおさのいみじくおもへる気色を御覧じてつくらしめたまふ詩、いとかなし。

また『大式高遠集』（桂宮本）にも

つ_一のくにの、すまのむまやにて

うらかせにものおもふとしもなければともなみのよるにそねられ

さりける

しかし、多くの場合は野宿のような状態であったことは『赤染衛門集』にある尾張下向の歌の詞書などで窺えるところである。

。七日多ち川といふ所にいきつきぬ、岸にかりやつくりて、ようさがた風いとはげしう、浪の音高う……

。あさつまといふ所にとまりぬ、その夜風吹く、雨いといたうふりて、もらぬ所なし、みな人ぬれてのやどりにだにをとりてもあるかなといふ、頼光が知る家なりけり

。むまづといふ所にとまる、よふくるま_一にあしの葉風いたくそよぐ、かりやに……

。また、野やとりしたる所にて……

『更級日記』^④をみてもほぼ同じようなようすである。

。門出したる所は、めぐりなどもなくて、かりそめの茅屋の、しとみなどもなし。簾かけ、幕などひきたり。南ははるかに野の方見やらる。

。同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、しもつさの国のいかたといふ所に泊まりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくていもねられず、

。皆人は、かりそめの飯屋などいへど、風すくまじくひきわたしたどしたるに、これはをとこなどもそはねば、いと手はなちに、あ

らあらしげにて、苦といふ物一重うちふきたれば、月残りなくさし入りたるに、

。天ちうといふ河のつらに、飯屋作り設けたりければ、そこに日ごろ過ぐるほどにぞ、やうくおこたる。

赤染衛門にしても、また菅原孝標の娘にしても、ともに夫であり父である人に同伴しての旅であった。その旅において飯屋が宿舎として欠かすことのできないものであったことは、この二人の旅程をみてもあきらかである。任国への国守の旅とて、それほど恵まれたものであったとはいえない。せいで『赤染衛門集』にある「頼光が知る家なりけり」とあるような、知人・縁者のような者の家に宿をととのえることほどしか、かなわなかったともいえよう。そうであるならば、なおさらのこと、寺社への宿泊が多くならざるを得なかったのは想像するにやすい。

また、子女を伴なう任国との往来において、ここ二例においては『延喜式』「主計上」におさめられた次の基準より多くの日数を要している。

尾張 行程上七日。下四日

上総 行程上卅日。下十五日

赤染衛門の場合は七月六日に都を出発し、^⑤十四日に尾張国府に着いていることから、四日間であるべきところを九日かかっている。^⑥

そしてまた、更級日記作者の場合には、上総出発が九月三日、上洛が十二月二日であるから、三十日間のところを三ヶ月かかって旅したことになる。『延喜式』の内容がそれほど守られていなかった証左ともいえようが、ちなみに紫式部達の越前までの旅程日数はこの『延喜式』で尾張と同じ、上七日。下四日であった。

また、任地に伴なうことのできた子弟の年齢も『養老令』に決められていた。それを『令義解』でみてみると、

凡外官赴任。子弟年廿一以上。ナハ、謂。子孫弟姪也。不レ称父祖伯叔之類。者、孝ノ軽頭レ重之義也。
不レ得ニ自随。一。幾内任官。不レ在此限。其須、覲問ニ者聽。キコト。

『更級日記』の作者の場合、帰京しているのが十三歳頃であるから、二十一歳以上の子弟を伴って下向したことはない。少なくともこの内容は守っていたのだといえよう。

紫式部と父藤原為時の一行は、赤染衛門と大江匡衡がそうであったように、^⑦京を出で逢坂越えの官道を通って琵琶湖へと出たと思われる。そして、宿泊したところでは前に引いた『朝野群載』にみえるように、道中の安全を祈願するため道祖神にひそかに奉幣したであろう。赤染衛門等の場合は京都を多分朝早くに出発したのである。流布本に「大津にとまりたるに」とあることから、一日で大津に到着している。

紫式部の場合も行程的にはそれほど違うものではなかったはずで



図1 文政七年版 浪華書房刊「近江国大絵図」部分

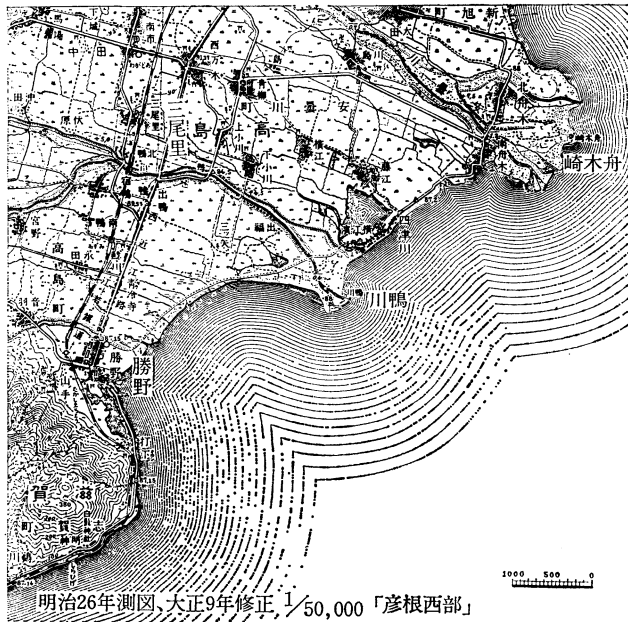


図2 舟木崎・勝野・明神崎付近

ある。

三

大津を舟で出発した紫式部達の一行は、琵琶湖の西岸添いに北上

していった。

近江の湖にて、三尾が崎といふところに、網引くを見て

20三尾の海に網引く民の手間もなく立居につけて都恋しも^⑧

三尾の地名については『和名抄』巻七に、高島郡として、「神戸、

三尾^美、高島^{太知}、角野^{乃都}、木津^津、桑原、善積、川上、大処、駒結

土毛」として示され、この地方の一郷名となっている。これについ

て吉田東伍氏^⑨は、白髭神社を先端とする明神崎を三尾が崎と推定し

た。そして結論的には吉田氏と同じになっているが、こまかな論証

をふまえ西井芳子氏も現在の明神崎を三尾が崎としている。万葉集

一一七一番、

大御船泊ててさもらふ高島の三尾の勝野の落し思はゆ

ここに出でくるのをみると、郡名としての高島、そして郷名とし

て三尾、小地名として勝野(現在の高島町)としてあらわれ、三尾郷

じたいは現在小地名として残っている「三尾里」を含む南部、勝野、

白髭あたりまでを指すと考えられる。そうすると明神崎が三尾が崎

であるということにもなる。しかし、現在の小地名として残って

いる三尾里の中を流れている鴨川の河口は、舟木崎と勝野とのほぼ

中央に位置し、一行が勝野に停泊したとすれば、最初に間近に通過す

る崎であった。そこには浮島のあったことも認められ(図1・2参

照)風光明媚なところであったようにも想像せられ、三尾郷の中を

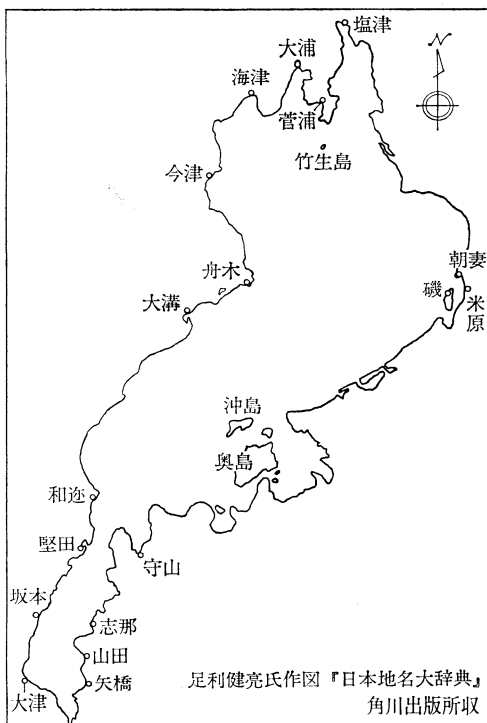


図3 近世頃の琵琶湖復元図

流れ出る川でもあり、ここを三尾が崎とする可能性も捨てきれない。

紫式部の航路は万葉集一七三四番にもあるように、

高島の阿渡の水門（安曇川河口の港）を漕ぎ過ぎて塩津菅浦今か

漕ぐらむ

と湖西を北行していくのが自然であったと思われる。前の歌にすぐ
 続いているかのように「又」と次に置かれる21番歌は

又、磯の浜に、鶴の声々鳴くを

紫式部 越前への旅

21磯がくれおなじ心に鶴ぞなく汝が思ひ出づる人や誰ぞも

とある。ここに出て来る「磯の浜」の位置については、種々の論点から意見の分かれているところである。まず、23番歌の塩津まで行く往路にあたる歌であるという点から、角田文衛氏は琵琶湖を横断し、東岸に位置する坂田郡磯村（現在の米原町大字磯）に向かったという説を立てた（図3参照）。角田氏は「入江の辺で鶴が鳴いているので、式部は感慨を催して（中略）昨日後にした都に髪をひかれる彼女の心境が滲み出ている」と歌の内容からも説明される。同じ説で一層歌の内容を細かに説明したのは竹内美千代氏である。氏は旅程としては不自然だとしながらも、都恋しい旅の心細さを歌っていること、また帰路の歌をすれば、このような感傷的な歌は帰途のものにはない故往路琵琶湖横断コース説を提示されている。

しかし、この説の立て方は視座を立てなおして考えてみなければなるまい。まず、琵琶湖の中で一番広い部分の横断の可能性についてである。まずは古い例として、藤原惠美押勝こと仲麿の乱において彼が息子辛加知が国守をしている越前にいったん引き返し、巻き返しを考え越前に下る道筋である。これには角田氏の論文があるの^⑮でそこでの整理を引くと

勢多―（陸路）―愛知関―（海路）―大浦―（陸路）―愛知関―（陸路）

―三尾崎

と愛知関を突破できず、やむなく引き返したところで死をとげていた。これでは同じ越前に向かうにしても急を要する行軍であったため湖上横断の必要がなかったといえばそうであるが、湖上遁走の可能性がなかったわけでもない。

また『源平盛衰記』に平治の乱で敗惨した源義朝軍が湖東へのがれた道筋は、大原―堅田―比良―高島―塩津―湖東の陸路コースをとって琵琶湖を陸路で対岸へ向かっている。^⑭

時代は下るが『太平記』巻九「北国下向勢凍死の事」で細川清氏のみ濃垂井宿への遁走がみえる。ここでは、京―坂本―堅田―和逵―海津―塩津と陸路を通り大きく琵琶湖を迂回するように美濃国へ逃がっている。これは南北朝時代においても湖上の横断は避けていることになろう。

それでは次に具体的な横断の例を示すと、それはほぼ中世に入ってからのものがほとんどある。まず一条兼良の『藤川の記』で文明四年（一四七二）五月初旬の旅が、大津松本―（陸路）―坂本―堅田―八坂―朝妻―醒井―美濃国へとという行程をとっている。仁和寺僧正尊海『あづまの道の記』天文二年（一五三三）十一月下旬の横断は、坂本―島郷―朝妻―東国へと進んでいる。『太平記』巻十五「奥州勢着坂本事の条」で五万余騎の軍勢を七百余艘の舟で志那―

坂本に渡している。建久四年（一一九四）正月のことであった。また、二条良基『小島の口ささみ』では文和三年（一三五四）七月廿日すぎに同じく坂本―志那間で横断している。『実隆公記』長享元年（一四八七）にも坂本―志那に渡り東江州『鉤の里』にむかったのがみえる。『言継卿記』では弘治二年（一五五六）九月に、坂本―志那への航路が記され、宗牧の『東国紀行』でも天文十三年（一五四四）九月下旬に坂本―島村へむかっている。『富士見道記』天文二年（一五三三）十月下旬の旅では坂本―しまのさと（仮泊する）―朝妻のコースである。西大寺長老観尊の『関東往還記』では大津―山田津―守山宿、五山禅僧碧山の『碧山日録』長禄三年（一四五九）三月の条には大津松本津―山湫村（山田津）へ渡ったのがみえる。以上、平安朝の例を見い出せないのは残念であるが、当然航路も整備されているはずの後世のいずれの場合においても横断に際しては琵琶湖の中央を横断することは避け、比較的安全に、かつ短距離である堅田以南で渡っているのである。これらのことからすれば、やはり当然いかなる理由があつたにせよ紫式部の一行が往路において湖の中央を横断したことは考えられない。

他にこの歌について清水好子氏が「磯」という地名を文献上、湖の西岸に見出すことはできないけれども、かなり一般的な名称でもあるので、現在まで残っていないにしても、過去にそう呼ばれた所が

なかったとは言いつれぬので、歌意ね重んじて、往路の作と考えたい。」とされたのは角田説とはまた別な角度において問題を孕む。しかしそれは湖西に今はなくなったであろう普通名詞的なおもむきをもつ「磯」を設定するとき、往路において都の出発がほぼ異説なく長徳二年の夏頃であったという点において、秋から冬にかけての渡鳥である「鶴」に対し「鶴の声々鳴くを」とその鳥の声を聞きとることのできた紫式部があったのであるから、鶴の飛び去った後の夏にこの歌がつけられたのは、これまた不自然であるといわざるを得ない。井上真理子氏の指摘した「^⑩と^⑪」ことばの用語法上からの「磯の浜」普通名詞説は確かに説得力がある。しかしやはり「鶴」の歌である点において西岸「磯」説は納得を欠くのである。

この21番歌を一つ置くとして、続く往路の歌は

夕立しぬべしとて、空の曇りて、ひらめくに

22かき曇り夕立つ浪の荒ければ浮きたる舟ぞ静心なき

塩津山といふ道のいとしげきを、賤のをあやしきさまどもし

て、「なほ、からき道なりや」といふを聞きて、

23しりぬらむ往来に慣らす塩津山世に経る道はからきものぞと

塩津山にさしかかった式部一行のことを認め得ることから、琵琶での上陸地点は塩津ということであやまりはないであろう。そして、

塩津から敦賀へとぬけて出たことになる。だが塩津から追分を通り敦賀に至る行筋は深坂越えと称して、正規の北陸道すなわち官道ではなかった。本来の北陸道は、塩津より西の港海津から愛発関を通り追分から敦賀に通う道であった。距離にして塩津出発の深坂越えは二里半であるが「からき道なり」ともいっているように傾斜は急であった。それに対して北陸道の方は距離こそ三里半と長いが比較的なだらかな道であった。紫式部の一行が何故この道を選んだかはわからぬが、『勘仲記』^⑫治暦元年（一〇六五）九月の越中の国司に付した太政官符によれば、北国の物資の運搬に用いられたコースとして敦賀津から塩津と大浦の両方に運ばれる場合のあったことが記されているから、必ずしも官道海津―敦賀ばかりが用いられていたというわけではなかったことが示され得る。

敦賀をぬけた紫式部達一行は、16番歌で「西の海の人」が詠んでよこした通りの道筋を通ったとすれば陸路にしる、また海路にしる海岸沿いを五幡、杉津と行き山中峠を越えて、帰、今庄へ進んだといえよう（図4参照）。越前の国は催馬楽に「道の口武生の国府に我はありと、親には申したべ、心あひや、サキンタチャ」とあるように奥州への「道の口」であった。

大伴家持が天平十八年（七四六）越中守として任国へ下った時の歌

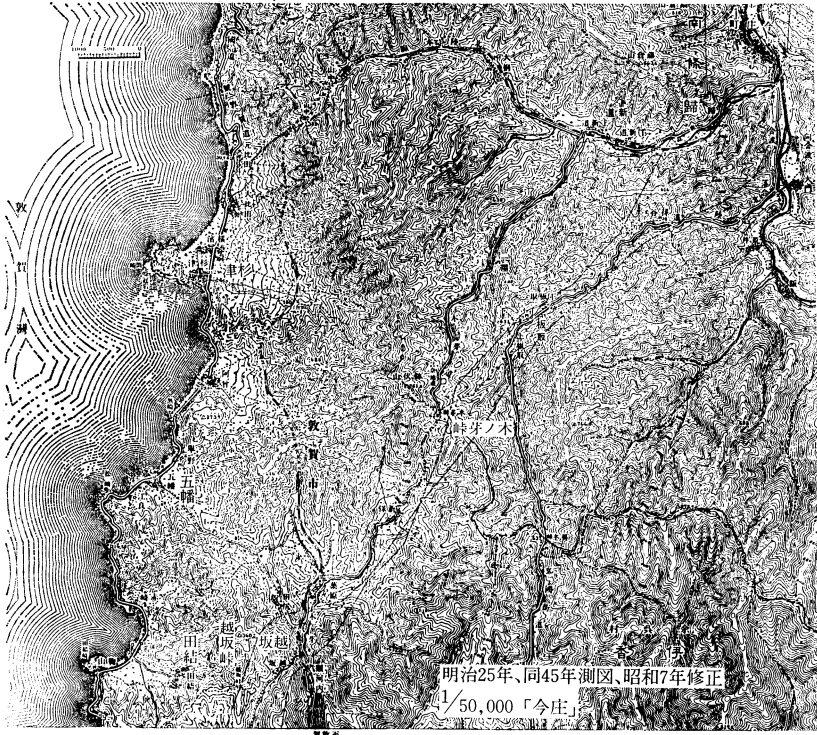


図4 木ノ芽峠付近

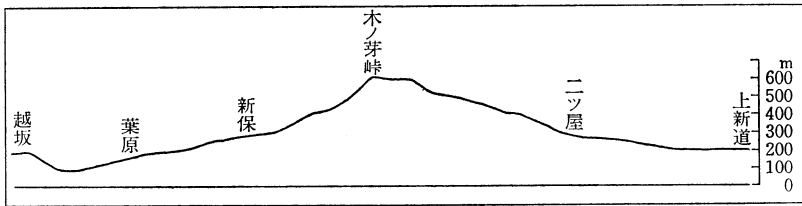


図5 上の図の木ノ芽峠越え道路断面図

かへるみの道行かむ日は五幡の坂に袖振れ我をし思はば

(万葉集四〇五五番)

他にも伊勢の歌

わすれなん世にも越路の帰山いつはた人にあわむとすらん

(新古今集八五八番)

この伊勢の歌であきらかなように「帰山」「いつはた」は歌枕として用いられたものであるし、また有名であったといえる。

この当時において越前に通う道筋としては『延喜式』にある駅舎「松原」「鹿茸」「済羅」「丹生」から大きく二つに分けられる。一つは万葉集巻三、三六七番の金村の歌「越の海の手結の浦を旅にして見ればともしみ大和偲ひつ」、また夫木集の「舟とむる田ゆひの浦の曙に越ちをいそく雁はなくなり」にあらわれる「田結」(現在はタイと呼ばれている)を通り、先に示した「五幡」へ海岸沿いに北上し、『万葉仙覚抄』のいう「いつはたこえはずい津へいづ、きのへこえはことにさかしき道なり」とある「杉津」から「大比田」、山中峠を越えて「鹿茸」へ行く道筋。もう一つは、この万葉仙覚抄のいう「きのへこえ」こと木ノ芽峠越えて「上新道」から直接気比大社前へ通じる道である。これは紫式部の帰路の道筋になる(図4・5参照)。

四

国に到着し日々をすごした式部は、父の任期切れ前に都を目指し帰路についた。国府での歌に都をしのぶ歌として

降り積みて、いとむつかしき雪を、掻き捨てて、山のやうにし
なしたるに、人々登りて、「なほ、これ出でて見たまへ」とい
へば

27ふるさとに帰る山路のそれならば心やゆくとゆきもみてまし
とある。その「かへる山」を通って帰路についたことは、

都の方へとて、かへる山越えけるに、呼坂といふなるところの、
わりなき懸け路に興もかきわづらふを、恐ろしと思ふに、猿の、
木の葉の中よりいと多く出で来たれば

81猿もなほ遠方人の声交はせわれ越しわぶるたごの呼坂
によってわかる。ここでいう「帰山」についてはであるが、『今庄町
史』は「今庄側としては新道あたりから木ノ芽峠辺りの山々を総称
したものと考えられるが、いっぽう敦賀側の人々の帰山とは東浦の
五幡辺りから、旧東郷村葉原を経て木ノ芽峠に到る山間一帯の山々
を指している。」とし、それぞれの住まいする地域差を示している
が、いずれにしても木ノ芽峠を中心とする(山は七六一・八メートル
を頂上とする現在の鉢伏山)山の総称としてよいだろう。この峠

越えの開削は次の記事によっておぼろげではあるがわかる。

七年（天長）二月庚午。越前国正税三百束。鉄一千廷。賜作_三箇

国鹿_一保嶮道二百姓上毛野陸奥_四山_一⑩

多分これが鹿蒜山の開道とみてよいだろう。

○忘るなよ帰る山路に跡絶えて日数は雪のふりつもるとも

（千載集四八一・俊頼）

○越えかねて今ぞ越路へかへる山雪ふる時の名にこそありけれ

（千載集四五九・頼政）

○頼めてもはるけかるべき帰山幾重の雲の下に待つらむ

（新古今一一三〇・加茂重政）

○けふまでは雪ふみわけて帰山これより後や道も絶なむ

（玉葉集二〇四〇・観意法師）

○都人くれるはやがて帰山何ぞはひとりとまるとまるといほりそ

（夫木集・兵衛内侍）

など、いくつかの歌には、帰山を越えているようすが見えるものが少なくない。この道筋は、山中越え（七里半越）よりは、はるかに距離的には短い行程のものである。

それでは、帰山の「呼坂」というところで作ったという、その「呼返」を考えるに、詞書が「かへる山越えけるに」と助動詞「けり」が用いられ、山越えは通り過ぎてきた過去のこととして見える。

あわせて帰山を越えて後にある「わりなき懸け路」が呼坂であったと考えれば、図4・5に見える越坂（おっさか）をその地と考えた。『南条郡史』はこの説を立てている。

此よびさかは越坂（敦賀郡東郷村）なるべし。（中略）更にたこに縁ある田尻、田結の中間に在る田越坂（後に越坂）ならむと推定す

この考えには賛成したい。この越坂のあたりは『和名抄郷名考証』のいう敦賀郡与祥郷にあたるどころと考えられている。『大日本地名辞書』は

与祥郷 和名抄、敦賀郡与祥郷。○ヨサカと訓む歟、今東郷村に越坂の大字あるは、ヨサカの訛なるべし、即東郷にあたる、敦賀の東北なる木目峠の山谷をいふ。

以上のことを整理すると、「たこ」は田結、田尻との関連で考え、仮りに誤写の点で見ると、「こ」は **よ**（古）から「ひ」へ、また **さ**（古）から **ひ**（悲）への連関が考えられよう。「よびさか」についてみれば、「よさか郷」の「おっ坂」から「よびさか」を連想するのは無理に過ぎるであろうか。また、『南条郡誌』にあるように「田越坂」を「田子のよびさか」の変化していったものと考えられるもやはり可能性としては残しておきたい。

次に置かれている歌、

水うみにて、伊吹の山の雪いと白く見ゆるを

82名に高き越の白山ゆき馴れて伊吹の岳をなにとこそ見ね

白山は年中万年雪をいただいているが、伊吹山においてはそうではない。紫式部は武生からはるか北東に眺め得た白山に比らべると伊吹山の雪はくらべものにならなかつたのは当然である。ここで旅の季節にふれておこう。25番歌で「初雪降る」とあり、27番歌で雪を山のように積み上げていることから、ひと冬を越前で過ごしたのはまちがいのないことである。その冬を過ごし、上落するにあたって詠まれた歌に、81番「猿の、木の葉の中よりいと多く出で来たれば」、またこの「伊吹に雪いと白く見ゆる」時期、そして、帰路の歌とした21番の「鶴の声々鳴く」季節の条件を十分にしなければならぬことから、秋もおしせまった頃の上落と考えざるを得ない。続く歌、

卒都婆の年経たるが、転びたふれつつ、人に踏まるるを

83心あてにあなかたじけな昔むせる仏の御顔そとは見えねど

であるが、海路を塩津から同じようにとって、湖西を南下していたと考えられるので、さきの24番歌が「又」として82番歌に続いてここに位置され得る。それに続くのが24番歌

水うみに、老津島といふ洲崎に向ひて、童べの浦といふ入海のをかして、口すさびに

紫式部 越前への旅

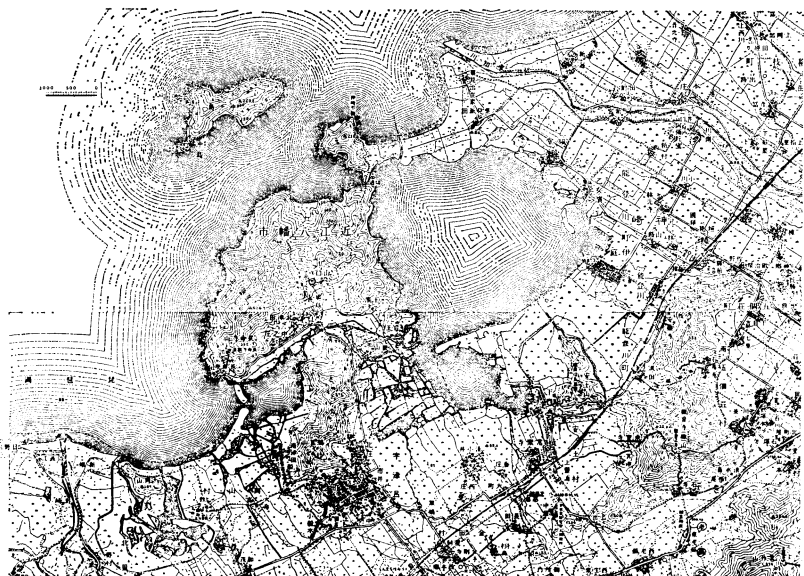


図6 奥島(老津島)周辺 上部、明治26年測図大正9年修正「彦根西部」
下部、明治25年測図大正9年修正「近江八幡」

24老津島島守る神や諺むらん浪もさわがぬ童べの浦

この老津島、わらはべの浦については角田氏が、往路の作と一環して考えられているため、風景からして塩津の西の入江であると、それほど強い論拠なくいわれた説、岡一男氏の志那湖(現在の平湖)に老津島、童べの浦と隣接させて考える二通のものが提出されている。しかし、どちらの説にしてもそれを決定づける論拠にはとほしく、あらたな地の選定が必要となる。南波浩先生は、『延喜式』卷三にある奥津島^{オウツシマ}神社一座(鈴鹿本においてはオキツとよんでいる)に注目され、現在この神社のある近江八幡市に隣接する奥島を考えられている。古くはこれは湖に浮かぶ島であったことは図1・6を見てみればあきらかなことである。現在では干拓が進み、すでに陸続きになり島の様相は呈していない。

『近江国輿地志略』に奥島を

岡山の西北にあり。湖中の一島なり、東西三町余。南北十四五町あり。(略)古歌に所謂澳津嶋山なり。往古此地に大社ありしとみえて「延喜式」に蒲生郡奥津島神社を載たり。

『神祇全書』第一輯、神名帳考証卷五では、

奥津島神社(名神大)今ヲキノ島ト云 万葉集十一奥津嶋山、漏津島姫命 旧事紀云思姫命 亦名奥津島姫命 素戔鳴尊荒魂也 『神社叢録』卷二十七においては

奥津島神社名神大奥津島は於岐津志麻と訓べし○祭神 奥津島姫命○澳津島^{湖中の一島也}に在すべし 今は廃亡して島中に八尾大明神白髭明神両社あり

以上のような「島守る神」の資料を添えてみても南波説として出される奥津島の老津島への音転を考えることに従いたい。また、この奥島には現在でも「洲崎」という小字地名が残っていることから、「老津島という洲崎」がこの老津島に存在することの一証左ともなる。

以上のことから、紫式部の越前往路帰路の道筋をたどり得たとはいえる。そして式部を都で待つものは、生涯において賢子を挙げた最愛の夫である藤原宣孝であった。

① 新訂増補国史大系『朝野群載』「諸国雜事、上」の「国務条々事」

② 岩波大系本『大境』第二卷

③ 本文は松村博司『赤染衛門集』尾張下向歌注解(南山国文『論集』第四号)所収の宮内庁書陵部蔵本に拠った。

④ 岩波文庫『更級日記』

⑤ 注③に同じ。

⑥ 注③で松村氏が指摘しているように、赤染衛門の夫大江匡衡は一度は任地に単身赴き、六月頃に一旦上洛して赤染衛門を伴って七月に再度任地に向かった際のものであるから、直接『延喜式』の行程日数に従わな

くてもよかったですであろう。またこの日数は物資運搬のためのものであり、ここでの旅程の日数に関しては、一つの目安程度のものであろう。

⑦ 注③に同じ。「尾張にくだりしに、七月一日にて、わりなくあつければ、夕涼みの程に関山こゆるに、清水のもとに車をとよめて、水飲みなどして、こと人／＼心をやることありげなりしに」そして、次の歌の流布本系の詞書に「大津にとまりたるに」とある。

⑧ 『紫式部集』は以下南波浩先生校注 岩波文庫（第六刷）による。

⑨ 『大日本地名辞書』第一巻

⑩ 西井芳子「三尾崎について」『古代文化』六卷六号

⑪ 角田文衛『紫式部とその時代』

⑫ 竹内美千代『紫式部集評釈』

⑬ 角田文衛「惠美押勝の乱」『古代文化』六卷六号

⑭ ここを『平治物語』では堅田より勢多へ南行し、東国へのがれたこととなっている。

⑮ 清水好子『紫式部』岩波新書

⑯ 井上真理子「紫式部集」の地名―磯の浜をめぐる詞書の文章―『愛文』16号

⑰ 『史料大成』二六一―二八

⑱ 新訂増補国史大系『類聚国史』巻八十三、正理五、正税。

〈付記〉

図2・4・6は、国土地理院発行の地図によった。またそれぞれがすべて北を指す。